

令和 5 年 6 月 23 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00126

研究課題名（和文）Empfindnis概念の系譜学的検討 美学の「感性論的転回」への概念史的寄与

研究課題名（英文）A Genealogical Study on the Concept of "Empfindnis:" A Concept-Historical Contribution to the "Aisthetical Turn"

研究代表者

杉山 卓史 (Sugiyama, Takashi)

京都大学・文学研究科・准教授

研究者番号：90644972

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、前世紀末以降進展中の美学の「感性論的転回」に掉さしつつ、「感性」に関連する重要な概念であるEmpfindnis（「感覚態」「再帰的感覚」などと訳される）に系譜学的な検討を加えた。後期フッサールにおけるEmpfindung（知覚の質料としての感覚）とEmpfindnis（自己受容的感覚）との区別を参照点としつつ、18世紀のテーテンスやメンデルスゾーンにおける用例を文献資料に即して検討し、この概念が18世紀から20世紀前半の思想家たちにおいて、どのように用いられ、それぞれの思想体系内でどのような役割を担い、そして、思想家間相互でどのような関係にあるのか、という問題を考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、人間の主要な心的能力の一つである「感性」について、その知られざる一面を思想史の中に発掘した。従来、EmpfindnisとEmpfindungとが訳し分けられること、その相違が注目されることは、フッサールを除いてほとんどなかったが、本研究は、その起源とも言える18世紀の用例を詳細に検討し、それを「感性の学」としての美学の成立・展開の過程に位置づけた。これが本研究の学術的意義である。

研究成果の概要（英文）：Following the "aisthetic turn" of aesthetics since the end of the last century, this research project examined the concept of "Empfindnis," which is significantly related to the concept of sensibility, from a genealogical point of view. Referring to the distinction between Empfindung (sensation as material of perception) and Empfindnis (self-perceiving sensation) in the late Husserl, I investigated philologically the examples in the philosopher of 18th century such as J. N. Tetens and M. Mendelssohn and thereby consider how they used this concept, what role it played in each philosophical system, and how they were related each other.

研究分野：美学

キーワード：Empfindnis 感覚 感性 感情 フッサール メンデルスゾーン テーテンス アプト

1. 研究開始当初の背景

本研究では、前世紀末以降進展中の美学の「感性論的転回」に棹さしつつ、これまで看過されてきた概念を取り上げて歴史的視点から検討する。それが、“Empfindnis”という概念である。哲学史における既知の用例としては、後期フッサールのものがある。いずれも未完に終わった『イデー』や『間主観性の現象学』において、フッサールは知覚の質料でしかない *Empfindung* と区別して、みずからにふれるという自己受容的な感覚を “Empfindnis” と呼んだ。これまで「再帰的感覚」「感覚態」などと訳されてきた(統一的な訳語はいまだ存在しない)この語に対し、フッサールの新造語であるかのような訳注が既存の邦訳には見られるが、それは誤りである。すでに18世紀に、メンデルスゾーン、テーテンス、ヘルダーといった啓蒙主義の著名な思想家たちがその著作において用いていたのである。しかし、個々の思想家におけるその用法や役割、さらにはその思想家間での異同などについては、未解明である。さらに、フッサールにおいても『イデー』における用法と『間主観性の現象学』における用法との異同は未解明であるし、18世紀の啓蒙主義と20世紀の現象学とをつなぐものについても、やはり未解明である。

2. 研究の目的

以上の背景を踏まえ、本研究は、Empfindnis という概念は、18世紀後半から20世紀前半に至る思想家たちにおいて、どのように用いられ、それぞれの思想体系内でどのような役割を担い、そして、思想家間相互でどのような関係にあるのか、という問題に回答することを目指す。より具体的には、以下のように分節化される。

- (1) ドイツ啓蒙主義における Empfindnis 概念の解明
 - ヘルダーにおける
 - テーテンスにおける
 - メンデルスゾーンにおける
- (2) 後期フッサールにおける Empfindnis 概念の解明
- (3) 上記1と2の架橋

3. 研究の方法

以上の目的に基づき、本研究は以下の諸点を文献学的に明らかにする。

- (1) ドイツ啓蒙主義における Empfindnis 概念の解明
 - ヘルダーにおける
研究開始時点で用例を確認した著作は、『純粹理性批判のメタクリティーク』(1799年、以下『メタクリティーク』)と『トーマス・アプトの著作について』(1768年)であるが、後者はアプト『功績について』(1765年)における用例(これが語としての初出とされる)の引用であるため、主としてヘルダーの独自性が認められる前者における用法を、カントとの関係において検討する。
 - テーテンスにおける
『人間の本性とその発展についての哲学的試論』(1777年、以下『試論』)における同概念の用例を、やはりカントとの関係において検討する。同書は、カントの心的能力の三分法(これがなければ快および不快の感情の独自性を前提とする『判断力批判』(1790年)は成立しえなかった)に影響を与えたとされているからである。
 - メンデルスゾーンにおける
草稿「認識・感覚・欲求能力について」(1776年)と、『哲学著作集』(1771年)に所収の論考「崇高と素朴について」における用例を検討する。前者は、そのタイトルが示す通り、心的能力の三分法を提示してテーテンスと並んでカントに影響を与えたとされてきた。また後者は、1757年に『芸術文庫』に掲載された論考の改訂版であるが、初出時には Empfindnis という語は用いられていない。このことは、同じ主題を Empfindnis という新語によって論じ改めた、きわめて興味深い事例である。なおこれにかんして、フランクフルト版ヘルダー著作集の編者は、『メタクリティーク』におけるこの概念がメンデルスゾーンに由来し、メンデルスゾーンはフランス語の *sentiment* と *sensation* との相違をドイツ語で表現するために *Empfindung* と Empfindnis との区分を導入した、と注解しているが、それがフランス語のいかなる著作であるのかは不明である。これを解明することにより、Empfindnis 概念の流通経路を明らかにする。
 - ヘルダーにおける
- (2) 後期フッサールにおける Empfindnis 概念の解明
『イデー』と『間主観性の現象学』における Empfindnis 概念の用法の異同を明らかにする。
- (3) 上記1と2の架橋
上記1)2)の間に用法上の連続性が認められるか否かを検証する。

4. 研究成果

- (1) (上記の順とは逆に時系列順に記す)

上記の通り、Empfindnis の語としての初出はアプトの『功績について』(1765年)であるが、それはメンデルスゾーンとの密接な対話・試行錯誤の末に生み出されたものであり、アプトとメンデルスゾーンの「共同造語」とでもいうべきものであることが明らかになった。また、それは上記のようにフランス語の sentiment (快不快などの価値を含む「感情」ないし「感傷」と sensation (外的刺激を物理的中立的に受容する「感覚」と)との区分をドイツ語圏に導入する過程で造語されたものであるが、具体的には、コンディヤック『感覚論』(1754年)、エルヴェシウス『精神論』(1758年)、ボネ『魂の能力についての分析的試論』(1760年)など、いわゆる「感覚主義」の著作群における議論であることも、明らかになった。この三著は、いずれも18世紀中に独訳されており、特にエルヴェシウスの『精神論』はアプトの『功績について』に先立つ1759年に早くも独訳されているが、ここでは sentiment は Empfindung と、sensation は Gefühl der Sinne ないし sinnliches Gefühl と訳されている。これを承けて、アプトは当初 sentiment をそのまま Empfindung と、sensation を Empfund (動詞 empfinden の過去分詞 empfunden に由来)と訳そうとしたが、これに対してメンデルスゾーンは「Empfund は奇妙に響く」と異を唱え、代わりに Fühlung を提案した(ただし、その際 Empfindnis も候補には挙げている)。しかし、アプトはこれを採らず、かといって自らの当初案に固執することもなく、sentiment に Empfindnis という新語(ただしメンデルスゾーンが示唆してはいた)を、sensation に Empfindung という既存の語を充てた。これを転回点として、sentiment と sensation との区分は逆転したと言ってよい。実際、コンディヤック『感覚論』の独訳(1791年)では sentiment が Gefühl と、sensation が Empfindung と訳されており、エルヴェシウス『精神論』の独訳とは逆転していることが見てとれる。そして、ここではすでに Empfindnis という語は用いられていない。Empfindnis は、「感覚」と「感情」ないし「感傷」との区分がドイツ語圏において定着するまで一時的に用いられた「中継ぎ」的な術語であったと結論できる。

テーテンスは、こうした流れにある意味で「逆行」するような仕方でのこの術語を用いていることが明らかになった。すなわち、sentiment を Empfindnis ないし Rührung と訳し、sensation を das Empfundene と訳し、私の外部にある何かが私の肌を射刺することによって私の身体に生じた変化を捉える(= 感觸 Gefühl) この変化を生じさせたものを「太陽」として対象化し、事態を「太陽が肌を射刺す」こととして捉える(= 感覚) この事態を「暑く不快だ」と否定的に、あるいは「暖かく快適だ」と肯定的に評価する(= Empfindnis) という、広義の感覚のプロセスを示している。このように見ると、テーテンスはカントの『純粋理性批判』(1781年)の成立に影響を及ぼしたとは言えるが、『判断力批判』まではなお距離がある、と言うべきである。

『メタクリティーク』におけるヘルダーは、この概念を当初の意味から離れて独自の意味で、とりわけ、カント批判という文脈で、「狂信(Wahnsinn)」「専制君主(Tyrann)」とも換言しつつ、否定的な意味で用いていることが明らかになった。このことは、この概念の変容を物語るものとして、注目に値する。

(2) 後期フッサールにおける Empfindnis 概念を構成するのは、以下の4契機であることが明らかになった。i)局在化、ii)二重性、iii)感情、iv)感情移入と、それに伴う間主観性。このうち、18世紀の Empfindnis 概念と共通するのは iii)感情の契機のみである。

本研究は、Empfindnis というマイナーな概念をめぐる地味な文献学的研究であるが、これによって美学が学問として成立・展開した経緯に新たな光を当てることができ、ひいては美学の「感性論的転回」にささやかながら寄与しえたと自負している。他方、フッサールは一八世紀の Empfindnis 概念を(いかにして)知りえたか(=当初の課題(3))については、いくつかの手がかりを得ることはできたが、具体的な見取図を描くまでには至らず、今後の課題である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 杉山 卓史	4. 巻 605
2. 論文標題 Eine kleine Geschichte des Begriffs vom "Empfindnis"	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 哲学研究	6. 最初と最後の頁 21 ~ 46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14989/JPS_605_21	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 4件）

1. 発表者名 Takashi Sugiyama
2. 発表標題 Threshold as an Aesthetic Phenomenon in the Everyday Life
3. 学会等名 8th Mediterranean Congress for Aesthetics（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 杉山卓史
2. 発表標題 直観形式としてのCT その開発の美学的意義
3. 学会等名 フンボルト・コレーク東京 2019 『神経系人文学と経験美学』（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Takashi Sugiyama
2. 発表標題 Masakazu Nakai as the Pioneer of the Aesthetics of Sports
3. 学会等名 21st International Congress of Aesthetics（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 杉山卓史
2. 発表標題 Empfindnis概念小史
3. 学会等名 京都哲学会公開講演会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 杉山 卓史
2. 発表標題 近世美学における「心臓の言語」
3. 学会等名 第69回美学会全国大会（国際シンポジウム「ハート形のイメージ世界：見えるものと見えないもの(The imagery of hearts: visible and invisible)」）（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 蜷川 順子	4. 発行年 2021年
2. 出版社 晃洋書房	5. 総ページ数 272
3. 書名 ハート形のイメージ世界	

1. 著者名 美学会	4. 発行年 2020年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 768
3. 書名 美学の事典	

1. 著者名 Yasuhiro Suzuki, Katsushi Nakagawa, Takashi Sugiyama, Fuminori Akiba, Eric Maestri, Insil Choi, Shinya Tsuchiya	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Springer	5. 総ページ数 94
3. 書名 Computational Aesthetics	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>京都大学教育研究活動データベース https://kdb.iimc.kyoto-u.ac.jp/profile/ja.10cbbfa119e632e4.html</p>
--

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------